社　会　科

生方　佑樹　　剣持　智之　　千明　隼

主題「平和で民主的な考えから、実現したい未来を切り拓く生徒」の育成

1　主題設定の理由

社会科は「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成することを最上位の目標としている。平和で民主的とは、争いがなく穏やかな状況を望み、一人一人のもつ権利が尊重されていることである。このような「平和で民主的な考え」を基に生徒自らが課題を設定し、社会科の学習に責任をもって取り組むことで、平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎の育成につながると考える。社会科の学習で身に付けた資質・能力と、探究的な学びの中で深化した「平和で民主的な考え」を基に、生徒は実現したい未来を切り拓いていくことができるだろう。

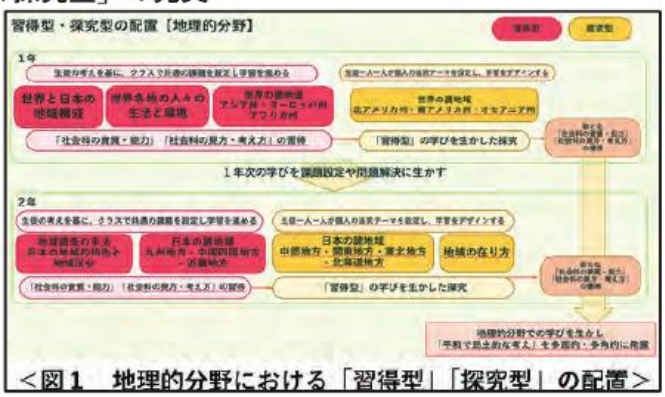
昨年度は、生徒が思い描く実現したい未来と現代社会とのギャップから、「平和で民主的な考え」を基にした「分野課題」を生徒の意見を基に設定した。各分野の中項目、大項目を１つの大単元として、「分野課題」を基に設定した大単元の課題を解決するために、社会科の資質・能力を身に付けるための「習得型」と「探究型」を大単元内に設定した。「探究型」とは、「習得型」で得られた資質・能力を基に生徒が学習をデザインするものである。「探究型」においては、生徒自身が追究テーマを設定し、学習計画を立案することで、自身の実現したい未来との関わりを意識し、エージェンシーを発揮しながら探究的な学びを深めることができた。一方で、探究が一面的な視点に偏り、社会的事象を多面的・多角的に捉えられない生徒も見られた。主な原因としては、自身の思いから追究テーマを設定し、生徒が学習をデザインする際に、社会科の見方・考え方を働かせながら学習計画を立案したり、探究の途中で自身の学びを振り返り、学びの偏りや不足している点を捉え、見通しを修正したりすることが不十分だったことが挙げられる。「習得型」で身に付けた資質・能力を生かし、「探究型」での学びを自己調整していくことで、生徒はエージェンシーを発揮し自身の実現したい未来を切り拓くために学習に取り組むことができると考える。教師は、生徒の学びに寄り添い、称賛や揺さぶりを与えるなど、生徒が資質・能力を生かし、自身の学びを振り返るための支援を行うことで、生徒は AAR サイクルを回し続ける。それにより、実現したい未来と社会科の学びとのつながりや「平和で民主的な考え」について問い続け、「平和で民主的な考え」を多面的・多角的に発展させることが期待される。

以上のことから、今年度も継続して研究主題を「平和で民主的な考えから、実現したい未来を切り拓く生徒」の育成とし、振り返りをもとに探究的な学びを深めるための具体的な手立てを通して実践研究を進める。

2　生徒がエージェンシーを発揮し、振り返りをもとに探究的な学びを深めるための手立て

(1) 探究的な学びを充実させるための「習得型」、「探究型」の充実

昨年度の課題を踏まえ、今年度は「習得型」と「探究型」の充実を図る。「習得型」は、生徒の考えを基に設定した共通の課題解決を進める中で、知識及び技能を中心とした資質・能力を習得するとともに、社会科の学び方を習得するために行う。「探究型」では身に付けた資質・能力や学び方を生かして生徒が自ら学びをデザインすることで、探究的な学びを深め、身に付けた資質・能力を更に発展させる。大単元の前半に「習得型」、大単元の終わりに「探究型」を配置することで、「習得型」で身に付けた知識及び技能や社会科の学び方を「探究型」に生かすことができ、大単元内で社会科の資質・能力全体を育成できると考える（図１）。ま



＜図１　地理的分野における「習得型」「探究型」の配置＞

た、「習得型」の学びは、別の大単元にも生かすことができるものであるため、大単元の学習を進めたり、学年が上がったりするにつれて、より質の高い探究的な学びを実践することが期待される。

(2)これまでの学びを振り返り、自身の探究的な学びに生かす「探究カード」

今年度は「習得型」、「探究型」において「探究カード」を用いて、２つの型の学びを関連付けられるようにする。「探究カード」には、政治、経済、文化、対外関係など、社会科の学びで大切するべき要素や、社会科の見方・考え方が示されている（図２）。「習得型」では、教師が「探究カード」を示すことで、生徒は社会科の学ぶ上で必要な見方・考え方を身に付けることができる。「探究型」では、教師が生徒の学習の過程を見取り、「探究カード」の視点に沿って称賛や揺さぶりを与えたり、資料や他者の学習計画や振り返りを共有できる環境を整えたりすることで、生徒は自身の探究の偏りや不足に気付き、次の学びへの見通しをもつことができる。生徒は探究的な学びを進める中で、「探究カード」に示された視点を基に自身の学びを振り返り、これまでの学びを想起し、学習計画を見直し、次の学びへの見通しをもつことができる。生徒が「探究カード」を用いて学習を振り返ることで、探究的な学びを発展させることができ、社会的事象を多面的・多角的に捉え、自身の考えを表現することができると考える。



＜図２　歴史的分野の探究カード＞

３　授業実践例

(1) 単元　　「近代の日本と世界」前半

(2) 実施時期／学年／配当時間　　令和８年３月／第２学年／探究型　全５時間

(3) 単元の目標

開国とその影響、富国強兵・殖産興業政策、文明開化の風潮などを基に、明治維新によって近代国家の基礎が整えられて、人々の生活が大きく変化したことを、江戸時代の様子と比較することで理解することができる。また、明治政府の諸改革の目的、近代化がもたらした様々な分野への影響を、世界の動きと関連付けながら、多面的・多角的に考察し、表現することができる。

(4) 実践の概要

第１時には、前時までの「習得型」で得た江戸幕府が開国したことによる影響を学級全体で共有し、大単元の課題「日本はどのように近代化を進めてきたのか」を基に、生徒個人が追究テーマを設定した。追究テーマを設定する際、生徒が「習得型」での課題設定の方法を想起できるように「歴史探究カード」を用いた声掛けを教師が行い、生徒は５時間の見通しをもち、自身の学習計画を立案した（図３）。例えば、歴史的分野の「分野課題」を基に追究テーマを「明治維新はどのように起こって、今までの時代とはどのような変化があったのか？」とした生徒Ａは、追究テーマを設定する際に、「相互関係」と「５W1H」の「探究カード」に着目し、これまでの時代との違いに着目しながら探究を進める計画をデザインした。第２～４時では、個人の計画に沿って探究を進めた。生徒Ａは第２時の振り返りで「国内の政治で近代化する様子がよく分かった。友だちの探究の様子や振り返りを見ると、近代化の要素は政治的な国の仕組みだと考えていたが、身分や文化も関連するかもしれない。」と書き、次時の見通しをもち、学習計画を修正しながら探究を進



＜図３　生徒Ａの学習計画表＞

めた。教師は生徒の学習の過程を見取る中で、「探究カード」を生徒Aと共に確認をしながら、「国内では江戸時代から大きく変化した様子が捉えられているけれど、外国から見たときに本当に近代化したと言えるのかな？」と投げかけた。生徒Aは自身の探究を振り返り、ここまでの探究で得た知識を「対外関係」の面に着目しながら捉え、探究を進めた。第5時には、生徒Aは生徒同士の考えを交流する中で更に自身の考えを発展させ、「明治維新によって、日本は江戸時代の体制と大きく変化し、身分制度や教育など様々な部分で現代に近付いていた。欧米の文化や考えも取り入れたことで人々の生活も大きく変化した。しかし、以前として欧米諸国とは不平等条約が結ばれており、国内の整備だけでは本当の意味での近代化はなされなかったのではないか。」とまとめ、自身の追究テーマを江戸時代と比較し、多面的・多角的に考察した（図4）。また、第5時の振り返りでは、「私は一度、明治維新の政策は失敗だったのではないかと考えた。けれど、一つの面や当時の結果のみから成功・失敗を考えるのではなく、それぞれの政策が当時や、未来にどのような影響を起こしたのか考え、その結果から明治維新自体はどのような効果かがあったのか考えると、考え方を改められた。明治維新は未来を見据えた改革だったが、私が当時の国民だったら不満はとても多くあったと思う。これから行う明治維新後の単元では政府が目指す社会を支える国民たちに向けた政策を行なっていくべきだと思った。今後も今回のように一つ一つの政策に対して当時の反応だけをもとに価値を考えるのではなく、それぞれの目的に合わせて結果をみる時代を変え、どのような効果があったのか考えられるようにしたい。」と、「探究型」での学びを振り返り、次時への見通しをもった。



＜図4　生徒Aの「学びマップ」（大単元の学びを一つにまとめたもの）※枠、吹き出しは筆者＞

4　研究の成果と課題

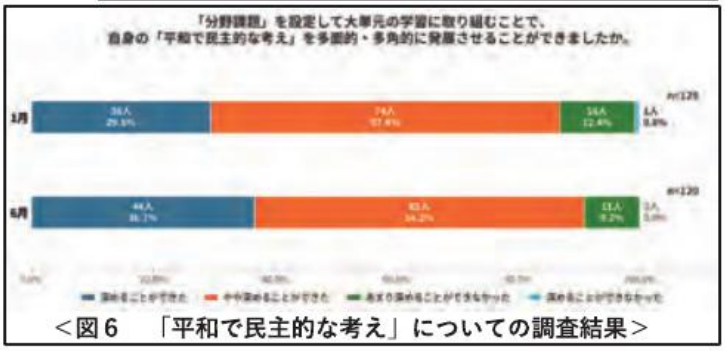
成果として、教師の見取りや揺さぶりを基に、生徒が自身の探究を振り返ることで、「探究カード」の視点を基に学習計画を修正し、次の学びへの見通しをもつ姿が見られた。このことから、「探究カード」は生徒がAARサイクルを回しながら探究的な学びを深めるための支援として有効であったと考える。また、「習得型」においても、学びを進める上で、得られた知識を「探究カード」の観点に基づいて整理

し、考えを深めている姿が見られた（図５）。

昨年度１月に実施した現在の３年生を対象としたアンケート調査では、「「平和で民主的な考え」を多面的・多角的に発展させることができた」と回答した生徒が 86.9%であり、今年度６月に実施したアンケートでは、同様に答えた生徒が 90.9%であった。（図６）。5%水準で有意差は認められなかったが、4 件法を順序尺度として捉えた片側検定では向上傾向が見られた（p=.080）。



＜図５　生徒の「学びマップ」※枠、吹き出しは筆者＞



＜図６　「平和で民主的な考え」についての調査結果＞

また、３年生で行った歴史的分野の大単元「近代の日本と世界」の終わりに行った分野課題への振り返りでは、「自分の実現したい未来のためには、これから大人になる私たちが平和への意識を高める必要がある。戦争には国際関係など複雑で分からないこともあるが、戦争は何も生まず、国民全体を巻き込んでしまう。大戦を経験していない世代だからこそ、同じ過ちを繰り返さないようにしなければならないと思った。」という記述が見られ、探究的な学びを通して自身の「平和で民主的な考え」を多面的・多角的に発展させている様子が見られた。

以上のことから、多くの生徒は「分野課題」と関連付けた追究テーマを設定し、「習得型」で身に付けた資質・能力や見方・考え方を働かせて、多面的・多角的にそのテーマを追究していくことで、身に付けた社会科の資質・能力を基に、自身の「平和で民主的な考え」を発展させることができたと考える。

課題として、社会的事象を多面的・多角的に捉え、AAR サイクルを回しながら探究を深める姿は見られた一方で、その学びを自身の実現したい未来や公民としての当事者意識に結び付けることが十分ではない生徒も見られた。社会科の学びがどのように自分の人生や実現したい未来に影響をもたらすかを生徒が実感し、学びをより自分事と捉えるための工夫が必要だと考えた。

5　今後の展望

これまでの研究では、社会科の学習と実現したい未来とを関連付けて、探究的な学びを実践することができた。今後は、生徒が「実現したい未来を切り拓くには、社会科を学ぶこと不可欠である」という実感をもち、社会科を学ぶ必要感を感じられるようにしていきたい。生徒が「将来社会の担い手となった自分が、社会科で学んだことを生かし、実現したい未来を切り拓いていくのだ」と公民としての当事者意識をもてるような工夫をしていく必要があると考える。

＜参考文献＞

群馬県教育委員会（2019）『はばたく群馬の指導プランⅡ』
伊藤　崇達（2026）『教師のための「自己調整学習」ガイドブック』,明治図書出版.
文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説　社会編』,東洋館出版社.
難波　駿（2024）『学び方を学ぶ授業』,東洋館出版社.
白井　俊（2020）『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』,ミネルヴァ書房.